文化

沈黙に向き合う
沖縄戦 聞き取り47年 〈12〉

石原 昌家

青年30数人が戦死
元「巡査」恨まれ ぬれぎぬ
伊是名島虐殺事件 ④

上本部村出身の家畜商（チナースー）や奄美3少年の虐殺という伊是名島虐殺事件について、元「駐在巡査」（以下巡査）は自らの関与を否定した。そして「指導者に裏切り者がいる。奥がある」とだけ言い残し、それ以上の証言は拒み続けた。

33回忌

「奥」とは一体何を指すのか。なぜ証言を拒むのか。「タブー」に踏み込んだ私にとって、そのことを解明することこそが最大の課題になった。

1977年は沖縄戦で死没した人たちの33回忌の節目で「終焼香（ウワイスーコー）」ということもあり、沖縄戦体験者が自然発生的に体験を語り合い、検証し合う状況が生まれた。

特に那覇市は「戦中戦後体験記録委員会」を立ち上げ、大々的に戦争体験を記録する運動を展開した。私も委員会の1人として関わり、体験者に重い口を開いてもらい、語ってもらった。体験者が自ら語り始める兆しも現れていた。これまでとは明らかに違う機運が高まりつつあった。

私はその機に乗じて78年1月末に『虐殺の島―皇軍と臣民の末路』（晩聲社）を出版した。元「巡査」による脅迫が続く間、私は彼の身の潔白を裏付ける証言を得たことは連載10回目で述べた。その書で元「巡査」のいう「奥がある」ことを明らかにし、証言を拒む理由の真相を突き止めて書いたつもりだ。

発刊半年ほど前に、自宅の外便所入り口に包丁が投げ込まれ、110番通報で警察官4人がパトカーで駆けつけたのを最後に、脅迫はなくなった。元「巡査」は「虐殺の島」を読んでくれたに違いない。自身へのぬれぎぬの疑いが晴れたと感じたことだろう。一人そう思い、胸をなでおろしたものである。

1978年1月末に発刊された「虐殺の島―皇軍と臣民の末路」（晩聲社）

「権威筋」と「当局」

『虐殺の島』発刊から21年後に出版された仲田さんの『島の風景』では、元「巡査」のいう「指導者」と「奥がある」という事柄をどのように捉えているのか。

45年6月3日、米軍は伊平屋島へ上陸したものの、伊是名島は放置していた。だが数日たつと「じわりじわりと危機感が島を狂騒に追い立てはじめた」「どこのだれかから流れた指令か」「字の伝え役が各班の班長にある指令を流した」「指令はもっとも大きい村的規模の、正体不明の『権威筋』から流れてきたように思える」（228ページ）と仲田さんは記している。

島全体を帝国日本の一離島として全体主義へと統制していく支配者。その姿を正体不明の「権威筋」と表現している。

米軍占領下に置かれた伊平屋島とまだ戦時下のままだった伊是名島を行き来して、米兵に日の丸旗をあげたらさまざまな見返り品がもらえると話す家畜商のチナースーと身売りされてきた島人に反発する奄美の3少年らの言動を咎めて非国民・国賊として扱い虐殺するにいたった日本将兵（敗残兵）グループや島の青壮年らを「当局」という言葉で表している。

そして仲田さん自身が見聞きした虐殺の場面を微に入り細に入り描きながら、自身も「当局」の一員とみなしている。（305～323ページ）。

虐殺されたチナースーには戦中までに、上本部村（現本部町）の本妻との間に長女、長男、次男の子をもうけていた。さらに伊是名島でも「現地妻」との間に子どもがいた。

チナースーの本妻の次男である喜納政吉さん(87)は現在も健在だ。私はこの原稿を書いていた2月8日、喜納さんに電話で仲田さんの著書「島の風景」（1999年）の存在を知っているかをたずねた。実父が虐殺された場面が詳細に書かれている同書について、喜納さんはすでに読んでいた。

「本妻には女の子ばかりで男の子ができなかったと誓いてあるので、仲田さんに電話した」とのことだった。すでに亡くなっていると思わされていた元「巡査」から抗議の電話を受けてびっくりした私と同様に、存在すら知らなかったチナースーの「本妻」の息子から、電話を受けた仲田さんもきっと驚いたことだろう。

仲田さんの本で政吉さんは父が虐殺された場面を読んで胸が張り裂ける思いをしたであろう。それはつい10年ちょっと前のことだ。

寅年生まれの徴兵

元「巡査」は「権威筋」「当局」には含まれていなかった。それなのになぜ、遺族から恨まれることになったのか。私が明らかにしたその疑問への答えにつながることを仲田さんはこう述懐している。

沖縄戦を間近にした44年、伊是名島の寅年生まれの青年たちが徴兵検査を受けることになった。島の将来を担う青年たちとして島人たちの期待を一身に背負っていた若者たちだ。三十数人が甲種合格した。

召集までは島に戻っていたので、全員の壮行会が連日のように続いた。しかし、米軍の空襲が続き、本島への渡し船も撃沈されて全員が島に閉じ込められた状態が続いた。

ある日、飲料水を求めて日本軍の鉄船が仲田港に寄港した。寅年生まれの新兵たちが突然、その船で沖縄本島へ渡ることになった。

「寅年の新兵が行って1週間も経たないうちに沖縄戦がはじまった。追い立てられたように若い命が全員火花と散った。戦後、この寅年の兵たちのいいようのない運命は遺された妻や親たちの胸をさまざまに掻き毟ったことだろう」（189ページ）。

この新兵たちの同乗を日本軍に懇願したのは、当時の兵事主任と駐在巡査らだったといわれている。そして戦後、特によそ者の元「巡査」に遺族の恨みが向かうように仕向けられていたようだ。元「巡査」には、そのような負い目があり、私への証言を拒んだのだと理解している。

（次回は3月14日掲載）